

環友 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	15
瑪瑙集	27
紅玉集	30
11月号月評	32
恵贈句集拝見(80)	34
恵贈俳誌拝見(46)	36
特別作品「花博のなごり庭園」	38
琥珀集作品鑑賞	40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	41
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ	42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	43
創刊100号 会員自選句鑑賞(1)	46
他誌転載	48
俳誌交歓	49
イザナミの言語学(11)	50
湖東三山吟行	52
琵琶湖俳句サロン	54
エッセイ「巫女さん」	55

今月の一句

筒袖に曳く花車一葉忌

桂 樟蹊子

(昭和四十四年作)

毎朝、または日を決めてやって来るリヤカーを曳いた北白川女の花売りに出会われた。京都にお住いがあった師は、見慣れてはいたものの、今朝は殊に紺緋の筒袖姿の白川女に惹かれた。それは丁度その日が一葉忌(十一月二十三日)であったことに気づかれ感動を新たにされた。花車と紺緋など色彩豊かな句、京都ならではの美しい光景である。

隆 子

彼岸花

塩路隆子

ひと峪をのぼりつめたる葛の花

有線で告ぐる入札きのこ山

黄泉人の挿頭かざしなるべし彼岸花

稲すずめ峡の田なべて知り尽くし

威し銃四囲のこだまの幾響き

母の忌を修せり雁の渡る頃

更けてなほ夜なべ媪の藁細工

十一月号光耀抄

塩路 隆子選

雲の沸く記憶の回路原爆忌
この石も仏なるべし秋時雨
二千個の五色灯籠池照らす
かなかなや山より下りてくる暮色
太古にもありし色なり曼珠沙華
夕陽いま刈田労ひみたるかな
山車曳く児はやも漢の顔を見せ
風入れて戻せる捨て句未練とも
花すすきの襲の色香袷襟
背守りの母の念ひや秋袷
三毛も黒も遊び飽きたり猫じゃらし
醒ヶ井に揺るる梅花藻水豊か
新涼のメニユーに変はるレストラン
食卓を飾る笹の葉七夕膳
薄もみぢ隠しおほせぬ瀧の丈
角砂糖ひとつに動く蟻の山
無花果の危き柔さ掌に
志貴皇子を送る晩歌や法師蟬
吾が家系の男は無口盃蘭盆会

塩路 五郎
伊藤 憲子
飯田美千子
伊東 和子
森下 康子
西郷 慶子
橋本 靖子
北尾 章郎
宮崎左智子
中村ふく子
国包 澄子
山口キミコ
竹内 悦子
難波 篤直
坂根 宏子
佐用 圭子
宮田 香
坂上 香菜
小澤 菜美

街中に百坪まりの稲の花
 戦友のやうな夫婦よ濁り酒
 ビル街に町家健在釣しのぶ
 星流れ女性専用バスの発つ
 通人と出会へる老舗走り蕎麦
 筆談に馴るる悲しさ九月来る
 鶏声に覚むる稲田や黄のまぶし
 朝日浴ぶる金の光や稲の露
 秋の蝶すでに暮色をまとひたる
 耳底に残る玉音八月来
 秋嶽の岩場をそろり大ザツク
 せせらぎの奥の緑蔭地藏尊
 棚経の間合ひを埋め鉦の音
 休暇果つ窓に指文字ありがたう
 ちちる鳴く祖母の機ある小暗がり
 食べたる気の名物ばなし食の秋
 湧水の流れに遊ぶ秋の蝶
 宵闇や詩吟の声とすれ違ひ
 鞍馬風秋の風鈴鳴り止まず
 猫じゃらしコップより野の息吹して

笠井 清佑
 石川 かおり
 桂 敦子
 小西 和子
 落合 晃
 伊藤 純子
 鈴木 照子
 笹井 康夫
 阪本 哲弘
 田中 浅子
 谷口 俊郎
 中川 すみ子
 福本 すみ子
 藤見 佳楠子
 松岡 和子
 松田 和子
 川崎 利子
 黒住 康晴
 栗倉 昌子
 伊庭 玲子

軸替へてひと足先に秋呼ばむ
 鷺草の微風を待てり飛ぶかまへ
 アナログ派デジタル派ゐて心太
 崖迫るローカル線や葛の花
 釜炊きの香もおもてなし今年米
 渋柿がごろりと落つる道の端
 甘辛でひと悶着や心太
 アルプスに囲まるる畑蕎麦の花
 蚊帳たたむ術教はりし妣律儀
 名残り鳴く法師蝉なり裏の木戸
 重陽の烏相撲のはづみけり
 複眼の中に吾あり鬼やんま
 故郷を味はふ加賀の太胡瓜
 行燈に絵あり書のあり地藏盆
 輝ける夏の星座の白デネブ
 野路行けば色づく千草嵯峨の里
 ひぐらしの啼きて独りと思ふかな
 爽やかやラインダンスの威勢よき
 精霊の来るも帰るも雨の中
 八月の雨荒あらし土石流

小林 久子
 片岡久美子
 大島みよし
 三川美代子
 井口 淳子
 土井久美子
 吉田 宏之
 山崎 里美
 山本 孝夫
 伊藤 和子
 鷺見たえ子
 稲田 和子
 大松 一枝
 木戸 宏子
 柴田 敬子
 杉田 福
 杉本 綾
 高谷 栄一
 高屋喜美子
 辻 香秀

身に入むや伏し目豊かに出土仏
 金運の女神笑むかに紅芙蓉
 命終や大地に還へる蟬骸
 父の忌や家族増えたる夏座敷
 長き髪なびく乙女や風知草
 梅雨明くる千本鳥居絵筆執る
 桔梗咲く明智の亡ぶ城跡に
 秋出水送りけり非難令
 恋文にルビ振るさまや水引草
 朝夕の礼儀正しさ玉すだれ
 狩衣の披講朗々乞巧奠
 金の湯の雨愉しむや二日月
 半時に一本のバス赤とんぼ
 雑草を従へ毅然芙蓉咲く
 絹史伝ふ明治煉瓦や栗実る
 矢のごとく吾も飛びたや夏燕
 高原の里の秋灯遠影絵
 雨の貴船焼鮎跳ぬる座敷膳
 秋の雨仏足石の白さかな
 掛香を吊るし無骨の運転手

辻 知代子
 十時 和子
 中井 弘一
 中井 登喜子
 中本 吉信
 西垣 順子
 西田 史郎
 能勢 栄子
 西村 敏子
 秦 和子
 人見 洋子
 平井 紀夫
 藤本 秀機
 増田 一代
 森田 利和
 宮越 久子
 山本 丈夫
 横田 矩子
 渡部 法子
 和田 郁子

琥珀集

秋時雨

伊藤 憲子

この石も仏なるべし秋時雨
源流に水の詩聴く櫛の花
見はるかす早稲の穂波に風やさし
電線を綱渡りせる月涼し
白砂に箒目の波小鳥来る
名月の飛べるがさまに雲に入る
いつきても迷ふ地下街秋の冷

彼岸花

塩路 五郎

友偲ぶ

飯田美千子

乙女像色なき風に胸を張り
彼岸花色を極めて棚田畦
名月に心の底を見透かされ
新涼や祝袋の墨を濃く
一つ二つ腑に落ちぬこととろろ汁
投げ入るる賽銭ことり秋風裡
雲の沸く記憶の回路原爆忌

大文字ゆるる炎に祈り込め
二千個の五色灯籠池照らす(広沢池灯籠流し)
終止符を打ちたる恋路曼珠沙華
業平の塩竈跡や秋風情(十輪寺)
空澄むや佗しさつのる女坂(光明寺)
軸かかへ観音詣秋ぼたん(善峰寺)
秋の野は詩情あふるる四重奏

盆支度

草刈りて草の匂ひを籠に詰め
白茄子の料理の思案なすは茄子
裏山の風来る軒や盆支度
点さるる祈り火京の夏逝ける
百号の重み手にする文月かな
ペディキュアの素足染しむ小買物
かなかなや山より下りてくる暮色

伊東和子

草の絮

伊吹嶺の花野は湖につづきけり
強面の羅漢たのしや草の絮
農継ぎてより疎みける西瓜割り
紙ひこう機風に流され秋の草
波音の遠く近きに鉦叩
翡翠の軸を掛け替へ居待月
夕陽いま刈田勞ひみたるかな

西郷 慶子

太古

空色のビルの硝子の鱗雲
笛聞けばをどりだす嬰や秋祭
秋桜を見てより生れし旅心
般若心経のテープ今様秋彼岸
太古にもありし色なり曼珠沙華
敬老日母の口癖年の所為
初秋やほろほろ苦きアメリカン

森下康子

小望月

蒼々とただ蒼々と小望月
奈良ホテル塔眺めつつ秋ランチ
秋の蟬刻惜しむかに大寺裏
鉢植系の枸杞の木やつと実の十粒
子等行かぬ繁みの奥に通草の実
姫路より月夜見よとのメール来る
山車曳く児はやも漢の顔を見せ

橋本 靖子

阿波踊

広がる輪故郷くにのメインの阿波踊
連中を率ゐる八十路阿波踊
葬送は踊がよろし連りーダー
風入れて戻せる捨て句未練とも
ドリンクバーの曲目変り秋に入る
土砂崩れあとの無気味さ秋出水
知己よりの新米質をねんごろに

敬礼す

地藏盆の隠居大学賑はへる
あれそれで通づる電話防災日
大文字吾に魂ふたつかな
花すすきの襲の色香袷袴
火の神は頑固に在はず曼珠沙華
重陽の名菓胃の腑を惑はする
新蕎麦派に讃岐うどん派敬礼す

北尾章郎

義仲寺

義仲寺に葬る御前思草
義仲寺を包囲してをり虫の声
木曾塚の右に翁の墓涼し
秋麗やてんでに亀の甲羅干
扁額の発句褪せをり昼の虫
背守りの母の念ひや秋杵
新米を研ぐ音軽し退院す(夫の退院)

宮崎左智子

サファイア婚

恙なきサファイア婚や秋澄みて
水引草に誘はれつつ大徳寺
醒ヶ井に揺るる梅花藻水豊か
近江田をゆるりと進む稲刈機
壬申の乱の関跡千草生ふ
縁日の地藏参りや京の辻
地藏会の供物授かる京わらべ

中村ふく子

山口キミコ

式部の実

竹内悦子

新涼のメニューに変はるレストラン
底紅やいまも韓国訪はずして
土囊なほ積めるままなり厄日過ぎ
頭に載せて妖怪ごっこ鶏頭花
大西瓜を持ってぬ齡となりにけり
飛蝗にも五分の魂命乞ひ
式部の実本当の恋知らぬまま

奈良の月

国包 澄子

思ひ出を塗れる絵日記夏終る
保津峡の大岩小岩石たたき
おほてらの鴟尾へ皓々小望月
三毛も黒も遊び飽きたり猫じやらし
懸崖菊先の先まで気を抜かぬ
城石の古れる刻紋鷓鴣猛る
放置輪に絡め手使ふ葛の花

鶺鴒舟

難波 篤直

炎暑来て熱中症に気を遣ひ
風雨去り再び戻る蝉の声
食卓を飾る笹の葉七夕膳
辻々に花火中止の立看板
老舗よりの煙香ばし鰻の日
繋がれて減水を待つ鶺鴒舟かな
出水避くる白鷺孤高岸に立つ

初紅葉

坂根 宏子

色なき風近江へ美濃へ山七重
さらしなしようま白波となり秋深む
栗南瓜おかめ南瓜のナイトショー
閉苑の刻延びて蓮静まれり
こもれびや森の茸の隊列に
薄紅葉隠しおほせぬ瀧の丈
薄もみぢ箕面にはやも赤提灯

狗尾草

佐用圭子

白龍のうねり攻め来る秋出水
角砂糖ひとつに動く蟻の山
狗尾草の千を友とし散歩徑
竹皮のレトロな色や夏草履
初物の載る新盆の白布かな
青田風葉をひるがへしひるがへし
ほづきのむかし遊びや母を恋ひ

菊香る

坂上香菜

秋澄める三井晩鐘の一打かな
肅々と仁王門寂び天高し
鴟を聞く檜一本いちぼく観世音
穴太積の苔生す小徑曼珠沙華
観音の天衣の髪や菊香り
威厳ある閻魔大王白桔梗(白毫寺)
志貴皇子を送る挽歌や法師蟬

新蕎麦

宮田 香

良 夜

小澤 菜美

机上より夏の島々数へけり
夏休み個性出でくる和紙づくり
透きとほる烏賊の刺身のなほ動く
無花果の危き柔さ掌に
新蕎麦の老舗一本丸机いちぼく
ふたり住に简单料理増えて夏
唐黍のひげとび出せり籠の穴

真夏夜の夢や騙し絵抜け出せず
みづうみの一隅占むる蓮奢り
硯洗ふ無心の刻を賜はれり
爆撃のありしことなど終戦忌(近江)
吾が家系の男は無口盃蘭盆会
花入れを陶に置き換へ良夜なり
豪雨過の寧らぎ得たり鴨の声

瑠璃集

ごきげんやう

栗倉 昌子

酒と肉こよなく愛し生身魂
迷ひ込む袋小路や地藏盆
鞍馬風秋の風鈴鳴り止まず
かなかなや天狗出さうな木の根道
新涼や鏡の吾にごきげんやう

宵 闇

黒住 康晴

猫じゃらし

伊庭 玲子

秋澄むや汀に残る足の跡
宵闇や詩吟の声とすれ違ひ
かまきりの首をか上げて動かさる
山峡の空を占めたり望の月
庚申の猿連なれり月光裡

バリトンのつくつく法師齒切よき
猫じゃらしコップより野の息吹して
二日月忽ち雲に溺れけり
上半月なれど満足雨雲に
月代や申し分なく空晴れて

野 菊

川崎 利子

花桔梗

小林 久子

花野にてアルプス四方に望みけり
磴の辺に楚々と一輪野菊かな
秋草の湖畔の径や山烟る
茅葺きの癒しの里や秋桜
湧水の流れに遊ぶ秋の蝶

(忍野八海)

軸替へてひと足先に秋呼ばむ
霧晴れて間近に迫る山七重
遠目にも穂高くつきり秋あかね
秘めごとを包む風情や花桔梗
良夜なり恋の乙女の願ひごと

十一月月号月評

塩路 隆子

雲の沸く記憶の回路原爆忌

塩路 五郎

核爆発の起きる際に出来た巨大な雲を、きのこ雲と呼び恐れられた。「雲の湧く」現象にさえ、その記憶の回路は原爆に繋がると言う。ただ筆者も同様。二度と許してはいけない原子爆弾の思考回路へと……。簡略に作者の意志まで表現されている。

野の石も仏なるべし秋しぐれ

伊藤 憲子

日生の鶴島には流人として扱われた殉教者の墓が訪れる人もなくひっそりと祀られている。ただ野の石がころがっているだけの墓地、仏であるから仏徒の墓であろう。それらが幾度もの時雨に見舞われているのが悲しみを深いものにしてている。

二千個の五色灯籠池照らす

飯田美千子

二千個もの五色の灯籠の浮かぶ広沢池。美の極致であろう灯籠。そのなかに紛れている一つの魂に手を合わす作者の敬虔な姿が浮かぶ。色彩の美しさ、灯籠を送る作者の願いなど連想として読者に伝わる。

かなかなや山より下りてくる暮色

伊東 和子

醍醐にお住まいの作者。夕方の主婦は気忙しい。それを急かせるかのように、裏山からはかなかなが鳴く。蝸の鳴く裏山からは静かに夕べの帷が降りて来る。「下りてくる暮色」の措辞がゆるやかな時の流れを感じさせて快い。

太古にもありし色なり曼珠沙華

森下 康子

明日香の棚田あたりの畦に咲く曼珠沙華を連想させる。高松塚の壁画にある雅やかな女性たちが浮かび、その衣裳に曼珠沙華の緋の色が重なる。十七文字から古代の人達の衣裳やいにしえの恋の場面など、さまざまな連想の広がる句である。

夕陽いま刈田勞ひみたるかな

西郷 慶子

稲刈りの済んだあとの安らぎを覚える句である。稲の収穫は、農耕民族の血の流れを曳く農民の一番豊かで寧らげる時であろう。受け継いだ農夫の安堵は言うまでもない。夕日までがそれを労っているように田の面を照らしている。作者の思いそのまま夕陽に置き換えている。